

旧約聖書、新約聖書

序論：安息日とその現代における誤解

現代の宗教界では、クリスチャンは安息日を守らなければならないと主張する人が多く、しばしばこれを日曜日の休息日と解釈しています。しかし、聖書を詳しく調べてみると、聖書における安息日の遵守と現代の慣習には大きな違いがあることがわかります。創世記 2 章 2-3 節には、「神は七日目に、ご自分のなさっていたすべての仕事を終えられた。それで、七日目に、すべての仕事を終えて休まれた。神は七日目を祝福して、これを聖なる日とされた。それは、神がその日に、ご自分の創造のすべての仕事を終えて休まれたからである」と記されています。また、出エジプト記 20 章 8-11 節には、「安息日を覚えて、これを聖なる日としなさい。六日の間は働き、すべての仕事をしなさい。しかし七日目は、あなたの神、主の安息日である。…主は六日の間に天と地と海と、その中にあるすべてのものを造り、七日目に休まれた。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なる日とされた。」とあります。さらに、旧約聖書では、週ごとの安息日だけでなく、レビ記 25 章 1-22 節で安息年（7 年ごと）とヨベル年（50 年ごと）についても記述されています。旧約聖書の時代の典型的なユダヤ人は、50 年間で 5,000 日以上 of 安息日を守っていたこととなります。これは、現代の「安息日を守る人」が主張する約 2,600 日をはるかに上回る日数です。

聖書の安息日の規定は厳格でした。神の民は家に留まるよう命じられていました（出エジプト記 16:29：「主があなた方に安息日を与えられたことを心に留めなさい。主が六日目に二日分のパンを与えられるのはそのためである。七日目には、皆それぞれ自分のいる場所にとどまり、誰も外出してはならない。」）。スポーツのための旅行、友人を訪ねること、教会礼拝のような正式な集まりに出席することは禁じられていました。調理も許されず、すべての食べ物は事前に準備しなければなりません（出エジプト記 16:23-29）。火を灯すことさえも、すべての労働が禁じられていました（出エジプト記 35:3：「安息日には、あなたの住居のいずれにおいても火を灯してはならない。」）。違反行為は死刑を含む重大な結果を招いた（民数記 15:32-36：「主はモーセに命じられた。『この男は死刑に処せられなければならない。全会衆は宿営の外で彼を石打ちにしなければならない。』そこで会衆は彼を宿営の外に連れ出し、主がモーセに命じられたとおり、彼を石打ちにして殺した。」）。

今日、安息日を定められた通りに守っている人はどれくらいいるのでしょうか？現代の解釈によってこれらの戒律が薄められているため、実際にはほとんどいません。これは、より広範な疑問を提起します。動物のいけにえ（レビ記 1～7 章）のような旧約聖書の慣習は、今でも拘束力があるのでしょうか？他の聖なる日（例えば、過越祭、仮庵祭）はどうでしょうか？今日、祭司制度や聖職者と信徒の制度は存在するのでしょうか？教会の建物は「神の家」なのでしょうか？古い契約（モーセの律法、またはトーラー）とキリストにおける新しい契約の関係とは何でしょうか？

この研究は、グループでの聖書研究や個人的な考察に適しており、儀式主義的、伝統的、あるいは非キリスト教的な背景を持つ人々にとって有益です。新約聖書のキリスト教の独自性を強調し、キリスト教世界における混乱、特にイエスの信徒は律法の儀式と民事の律法に従わなければならないという主張について論じています。

重要な導入節：

- コロサイ人への手紙 2 章 16 節：「ですから、食物や飲み物、あるいは祭りや新月、安息日に関して、だれにもあなたがたを裁かせてはなりません。」（パウロは旧約聖書の慣習に基づく律法主義的な判断を戒め、キリストにおける自由を強調している。）
- ヨハネによる福音書 4 章 24 節：「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」（イエスは、真の礼拝は場所や儀式といった物理的なものにとらわれず、内面的な変容に焦点を当てるべきだと教えている。）
- エペソ人への手紙 1 章 1 節：「神の御心によってキリスト・イエスの使徒となったパウロから、エペソにいる聖徒たち、すなわちキリスト・イエスにあって忠実な者たちへ。」（すべての信者は「聖徒」または聖なる者であり、聖性を民主化している。）
- テモテへの手紙第一 2 章 5 節：「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人であるキリスト・イエスです。」（キリストを通してのみ神に直接近づくことができるため、人間の仲介者は不要となる。）
- コロサイ人への手紙 2 章 17 節：「これらは来るべきものの影であって、本体はキリストにある。」（旧約聖書の慣習はキリストを予示していたが、成就したので、もはや義務ではない。）

二つの契約：新しい契約の優位性

聖書は、旧約（シナイ山でモーセを通して与えられた契約）と新約（キリストの死と復活によって始まった契約）を区別しています。ヘブライ人への手紙 9 章 15-17 節にはこうあります。「ですから、キリ

ストは新しい契約の仲介者です。それは、召された者たちが、最初の契約の下で犯した罪から贖われる死によって、約束された永遠の相続を受けるためです。遺言が関係する場合、遺言者の死が確定されなければなりません。遺言は、遺言者が生きている間は効力を持たないので、死によってのみ効力を持つからです。」（キリストの死によって新約が成立し、旧約は無効となりました。旧約は永遠の贖いをもたらすことはできませんでしたが、新約はキリストの犠牲を通してそれを可能にするのです。）

律法の道徳的な核心、すなわち神と隣人を愛することは、今もなお受け継がれています（ガラテヤ 5:14：「律法全体は、『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という一つの言葉に要約されます。マタイ 22:37-40：「…『あなたは心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。これが最も重要な第一の戒めです。第二の戒めもこれと同じです。あなたは隣人を自分自身のように愛しなさい。律法と預言者全体は、この二つの戒めにかかっています。』」）。しかし、具体的な戒めや規定は十字架で成就され、廃止されました。コロサイ 2:13-14：「あなたがたは、罪と肉の割礼を受けていないことによって死んでいたのですが、神はキリストと共にあなたがたを生かし、私たちのすべての罪を赦し、私たちに不利な法的要求を伴う負債証書を抹消し、それを十字架に釘付けにして、廃止してくださいました。」（「負債の記録」とは律法の要求を指し、キリストはそれらを取り消し、信者を儀式的な義務から解放した。）

クリスチャンは旧約聖書の律法に縛られていません（使徒 15:10-11：「それゆえ、なぜあなたがたは、私たちの先祖も私たちも負うことのできなかつくびきを弟子たちの首に負わせて、神を試しているのですか。しかし、私たちは彼らと同じように、主イエスの恵みによって救われると信じています。これは、イエスの弟子は律法に従わなければならないという主張に反論するものです。イエスは律法を成就しました（マタイ 5:17-18：「…わたしは律法や預言者を廃止するために来たのではなく、成就するために来たのです。まことに、あなたがたに言います。天地が滅びるまで、律法の一点一画も決して滅びることはなく、すべてが成就するでしょう。）。そして、律法の儀式的役割を終わらせました（ガラテヤ 3:23-25：「信仰が来る前は、私たちは律法の下に捕らわれていました…しかし、信仰が来た今、私たちはもはや監護者の下にはいません。）」）。

二重基準：新約聖書で排除される

旧約聖書は聖なる日と不浄な日を区別し、一貫性のない信仰を助長しました。ある日は聖なる日とされ、他の日は暗黙のうちに不浄な日とされ、「特別な」機会にこそより一層の努力が払われるという状況を生み出しました。しかし、キリスト教は日々の生活の中で弟子としての生き方を求めています（ルカ 9:23：「そしてイエスは皆に言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負ってわたしに従いなさい。』」、ローマ 12:1：「ですから、兄弟たちよ、神の

憐れみによってあなたがたにお願いします。あなたがたの体を、神に喜ばれる聖なる生きた供え物として献げなさい。これこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。』)。キリストが人生のあらゆる側面を贖ってくださるので、すべての時が聖なる時なのです。

二重基準は、次のものに現れる。a. 聖なる時間 b. 聖なる空間 c. 聖なる人々 d. 聖なるもの

新しい契約はこれらの区別を変革します（ペテロの手紙第一 1:15-16：「あなたがたを召された方が聖なる方であるように、あなたがたもすべての行いにおいて聖なる者となりなさい。『あなたがたは聖なる者となりなさい。わたしは聖なる者だからである』と書いてあるからです。』）。

聖なる時間：律法主義的な遵守からの解放

キリスト教徒は安息日の遵守から解放されています（出エジプト記 20:8-11、上記参照。コロサイ人への手紙 2:16、上記参照）。特別な日によって自分を正当化しようとする試みは束縛へとつながります（ガラテヤ人への手紙 4:8-11：「あなたがたは以前、神を知らなかったとき、本来神ではない者たちに仕えていました。…どうしてまた、弱くて無益な世の初歩的な教えに立ち返るのですか。…あなたがたは日や月や季節や年を守っています。私はあなたがたのために苦勞したのが無駄だったのではないかと心配しています。』）。（パウロは暦に基づく遵守に戻ることを異教の奴隷状態と同等視しています。）

初期の教会は日曜日に集まり（使徒行伝 20:7：「週の初めの日に、わたしたちがパンを裂くために集まったとき…」、黙示録 1:10：「わたしは主の日に霊に満たされていた…」）、キリストの復活を記念していた（マタイ 28:1）が、日曜日は安息日ではない。

律法遵守への反論：イエスは旧約聖書の律法を成就するためにその律法の下に生きた（ガラテヤ 4:4-5：「しかし、時が満ちたとき、神は御子を遣わし、女から生まれ、律法の下に生まれさせ、律法の下にある者たちを贖うために遣わされた。』）。復活後、恵みが勝利する（ローマ 6:14：「あなたがたは律法の下にあるのではなく、恵みの下にあるので、罪はあなたがたを支配することはない。』）。自由意志で行うのであれば、特定の日を守ることは許される（ローマ 14:5-6：「ある人はある日を他の日よりも尊いと考え、またある人はすべての日を同じように考える…日を守る人は、主を敬うためにそれを守る。』）が、それを強制することは罪である（ガラテヤ 5:1：「キリストは私たちに自由にするために私たちに自由にしてくださった。だから、しっかりと立ち、再び奴隷のくびきにつながってはならない。』）。

教訓：常に弟子となることを目指しなさい。

聖なる空間：どこでも礼拝を

神は「聖なる」場所に限定されることはありません（使徒行伝 7:48-49：「しかし、いと高き方は、人の手で造られた家には住んでおられません。預言者が『天はわたしの王座、地はわたしの足台である』と言っているとおりです。ヨハネ 4:24、上記参照）。旧約聖書では幕屋／神殿を通してのみ神に近づくことができましたが（ヘブライ 9:1-8：「最初の契約にも礼拝の規定と地上の聖所がありました…」）、キリストの死によって幕が引き裂かれ（マタイ 27:51：「…すると、見よ、神殿の幕が上から下まで二つに裂けた…」）、開かれたアクセスが象徴されました（エフェソ 2:18：「キリストを通して、わたしたちは皆、同じ霊によって父に近づくことができるのです。」）。

礼拝は生き方そのものです（ローマ 12:1、上記参照）。教会（人々）は神の家族です（エペソ 2:19：「ですから、あなたがたはもはや異邦人でも寄留者でもなく、聖徒たちと同じ市民であり、神の家族の一員です。」）。しかし、建物自体が本質的に聖なるものではありません。

トラーへの反論：神殿は影に過ぎなかった（ヘブライ人への手紙 8 章 5 節：「…彼らは天にあるものの写しと影に仕えているのです…」）。キリストの体こそが真の神殿である（ヨハネによる福音書 2 章 19-21 節：「…『この神殿を壊しなさい。そうすれば、三日のうちにわたしはそれを建て直します。』…イエスのご自身の体の神殿について語っておられたのです。」）。

教訓：あらゆる場面で神のために卓越せよ。

聖なる人々：キリストにおける平等

選ばれた「聖人」は存在せず、すべての信者が聖人です（エフェソ 1:1、上記参照）。イエスは唯一の大祭司です（ヘブライ 7:23-28：「…以前の祭司たちは、死によってその職にとどまることができなくなったため、人数が多かったのですが、イエスは永遠に祭司職を保持しておられます…聖く、汚れない、罪のない大祭司が私たちにはふさわしい方です…」）。すべての信者は王なる祭司職を形成し（ペテロ第一 2:9：「しかし、あなたがたは選ばれた民、王なる祭司、聖なる国民です…」）、霊的ないけにえを捧げます。

仲介者はただ一人、キリストです（テモテへの手紙第一 2:5、上記参照）。聖人やマリアに祈ることはこれに反します（ローマ人への手紙 8:34：「…死んで…神の右に座しておられるキリスト・イエスは、まことに私たちのために執り成しておられるのです。」）。聖職者と信徒の区別はありません（マタイによる福音書 23:8-9：「しかし、あなたがたはラビと呼ばれてはなりません。あなたがたには一人の教師がおり、あなたがたは皆兄弟だからです。また、地上でだれをも父と呼んではなりません。あなた

がたには天におられる父が一人だけいるからです。』)。皆等しく献身しており、それぞれ異なる賜物を持っています（エフェソ人への手紙 4:11-12）。

トラーへの反論：レビ族の祭司職は終わった（ヘブライ人への手紙 7 章 11-12 節：「祭司職が変われば、律法も必ず変わる。』）。トラーの遵守は、廃止された分裂を永続させる。

教訓：聖職者制度は二重基準を助長し、キリストの教えに反する（ガラテヤ 3:28：「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからです。』）。

なんてこった！その他諸々の聖なるもの

新しい契約は、あらゆる区別を廃止する。

- 聖なる食物（テモテへの手紙第一 4:3-5：「…結婚を禁じ、神が感謝をもって受けるべき食物を断つことを要求している者たち…神が創造されたものはすべて良いものだからです…」、ヘブライ人への手紙 13:9：「さまざまな異なった教えに惑わされてはいけません。食物によってではなく、恵みによって心が強くなるのは良いことだからです…」、マルコによる福音書 7:19：「…こうしてイエスはすべての食物を清いと宣言された。』）。
- 聖なる祭壇（ヘブライ人への手紙 7 章 27 節：「…キリストは、大祭司たちのように毎日いけにえをささげる必要はありません。…なぜなら、キリストはご自身をささげて、一度限りでそれを成し遂げられたからです。』、ヘブライ人への手紙 13 章 10 節：「私たちには祭壇があり、幕屋に仕える者はそこから食べる権利がありません。』）。
- 画像/アイコン（出エジプト記 20:4：「…あなたは自分のために彫像を作ってはならない…」、ヨハネの手紙一 5:21：「幼子たちよ、偶像から身を守りなさい。』）。
- 祭服、聖水、香炉、メダル、聖遺物、言語、呪文、十字架：これらは旧約聖書のカテゴリーを不適切に取り入れている（コリント第二 3:6：「…神は私たちを、文字による契約ではなく、霊による新しい契約の奉仕者となるのにふさわしい者としてくださいました。文字は人を殺しますが、霊は命を与えます。』）。

律法への反論：ローマ人への手紙 7 章 6 節：「しかし今、私たちは律法から解放されました。私たちを捕らえていたものに対して死んだのです。こうして私たちは、文字による古い方法ではなく、霊による新しい方法で仕えるようになったのです。」律法はキリストへと導きました（ガラテヤ人への手紙 3 章 19-25 節）。

結論：影から光へ

コロサイ人への手紙 2 章 17 節（上記参照）は、旧約聖書の要素が現実であるキリストを予示していたことを教えています。旧約聖書はもはや時代遅れです（ヘブライ人への手紙 8 章 13 節：「新しい契約について語ることで、彼は最初の契約を廃止しました。そして、廃止されつつあるものは、やがて消え去るでしょう。」）。現代のキリスト教の多くは、儀式や階層制に固執する点で、旧約聖書のユダヤ教を模倣しています。

律法の主張に反論する箇所：エフェソの信徒への手紙 2:14-15：「キリストこそ私たちの平和であり、私たちと私たちを一つにし、律法の戒めを廃止することによって、ご自身の肉体において敵意という隔ての壁を打ち壊されたのです…」 イエスは人間の伝統に対して警告を発しました（マルコによる福音書 7:6-8：「…『この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。彼らはむなしくわたしを礼拝し、人間の戒めを教えとして教えている。』…」）。律法の遵守はキリストから引き離される危険があります（ガラテヤの信徒への手紙 5:4：「律法によって義とされようとするあなたがたは、キリストから切り離され、恵みから離れてしまったのです。」）。

影から抜け出し、キリストの光の中へ入りましょう。そこには真の自由が満ち溢れています（ヨハネ 8:36：「もし子があなた方を自由にするなら、あなた方は本当に自由になるでしょう。」）。これは、儀式的な遵守ではなく、聖霊に導かれた生き方を力づけるものです。